

江古田小校長室便り 「温故創新」

H29 (2017)・0626 NO13

校長 伊波喜一

母語の持つ 温もりの声 懐かしき 語尾の延びるが 耳に残りて

用事で久しぶりに高校時代の友達と話をしました。筆者の田舎の方言は、語尾が延びるのが特徴です。若干、間延びしますが、語尾が柔らかい分、ほんわかとした感じになります。この方言と似たものに母語があります。母語は文字通り、この世に生を受けた赤子が初めて出会う言葉です。母語には愛情やら期待やら、願いやら夢やらの全てが込められています。この母語に触れているうちに、赤子は言葉を覚えるようになっていきます。両方に共通しているのは、耳から入る言葉であるということです。最初、保護者の言葉をオウム返しに繰り返していた赤子は、やがて自ら言葉を発するようになります。言葉や意味の違いを聞き分けられるようになると、その内に言葉を操り始めます。それだけ耳が良くなってきている証拠です。

私達は活字に取り囲まれて生きています。活字は便利ですが、それだけに頼ると耳が衰えます。耳が衰えると、言葉や文章のリズムを感じられなくなります。じつは、音読にはこのリズム感を高める力があります。そのリズム感の良さを、耳が良いというのです。